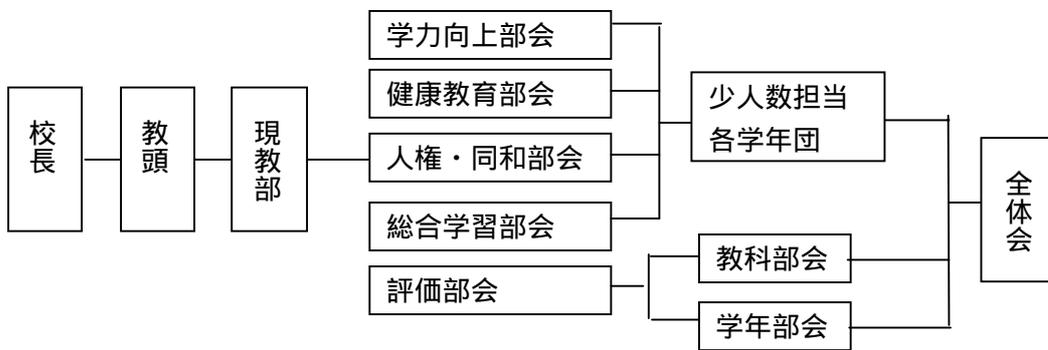


平成16年度	テーマ 生きる力をつけるための指導方法の研究 自ら学ぶ子どもの育成
	研究の見通し 学年の系統性を考慮した教科プラン及び単元指導計画を作成し、それに対応した評価プランを活用することで、子どもたちに「できる・わかる」を実感させることで、学びに対する意欲化が図れるのではないか。 研究の方法・内容 (1) 各学年、各教科ごとの年間指導計画の見直し (2) 評価プランの完成 (3) 少人数授業や習熟度別授業の充実

(3) 研究推進体制



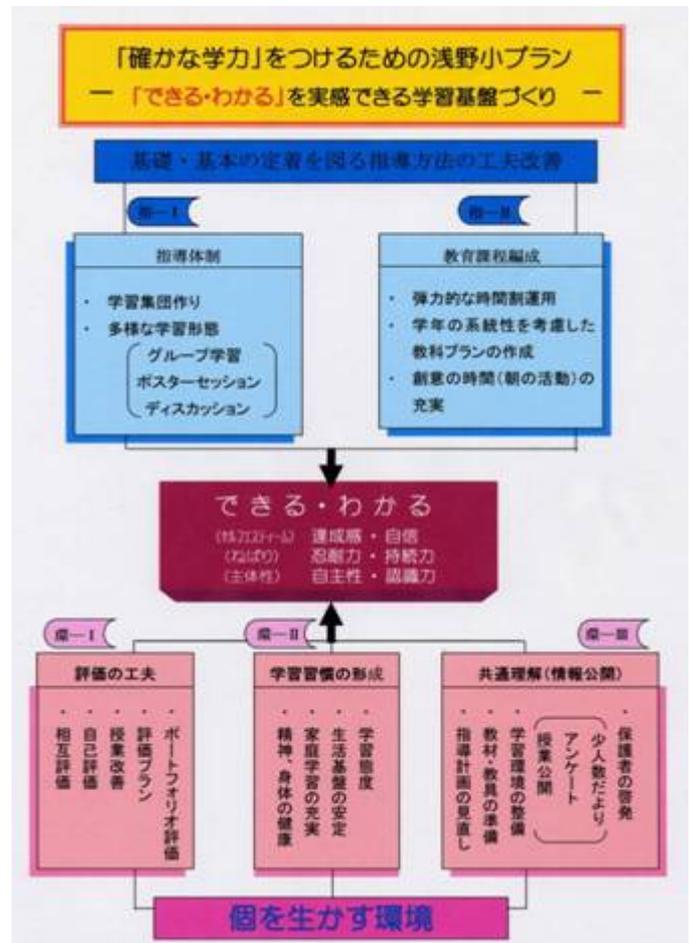
平成15年度の研究の成果及び今後の課題

1 研究の成果

(1) 「確かな学力」をつけるための浅野小プランの作成

本校では、現職教育研究主題を「生きる力をつけるための指導方法の研究」と設定している。「確かな学力」とは[生きる力]の知的側面である。その[確かな学力]は子どもたちが「できる・わかる」を実感することで、様々な学習に意欲を持って取り組むようになってこそ、身につけていくのではないかという考えのもとに、「確かな学力」をつけるための浅野小プランを作成した。

これにより、指導体制や教育課程編成といった基礎・基本の定着を図る指導方法の工夫改善や評価の工夫、学習習慣の形成、教職員及び保護者の共通理解といった個を生かす環境整備といった学習基盤づくりに必要なことが焦点化され、子どもたちに「確かな学力」をつけるための研究の方向性が見えてきた。



(2) 評価プランを作成することによって、複数で指導にあたる時の観点が明確化され、同じ基準で指導にあたり、評価をすることができるようになってきた。

子どもたちの伸びやつまずきを見取るための評価プランの作成

浅野小学校では、昨年度から評価プランを作成している。これは、少人数指導等で1学級を複数の教員が教える場合、子どもたちの伸びやつまずきを同じ基準で評価したいという考えから実施したものである。これによって、自分たちが行っている授業の課題や子どもたちがつまずきやすい点などが明確になってきた。

また、テストの点だけではなく、普段の授業での様子も加算するようにしており、授業の中では補助簿として活用し、児童の意欲・歓心・態度などの情意面の見取りの評価もするようにした。

次時の授業を見直し、改善点を見出すための評価

子どもたちのつまずきを発見した場合、次時の授業でおさえたい課題を確認し、改善点を見出す必要がある。こうした教師の姿勢が子どもたちの確実な「学力」を支える基盤となる。このように、本校では評価を自分たちの授業を改善する視点と考えた。子どもたちのつまずきに応じる手立てだけでなく、一人一人の「伸び」を大切に評価の在り方についての職員の意識が高まりつつある。

ノートのとり方や「振り返りカード」の書き方の基準を統一することで、系統立てて指導にあたる基盤作りができてきた。

自己評価と教師のアドバイス

子どもたちの自学を可能にするためには、子どもたちに学び方・考え方を身に付けさせると同時に自己評価力を付けさせることが課題である。子ども自身が、何を学習したのか、何ができるようになったのか、何についてはまだ分かっていないのかなどと、自分の学習について自己評価できるようになることが大切である。そこで低学年の段階から可能な範囲で自己評価をすることによって自己評価力を次第に高めていこうと取り組んだ。

今日の^{じゆぎょう}授業を^{ふりかえって}振り返ってみましょう。

- どんなことが分かりましたか。
- どんなことをしましたか。
- できるようになったことは何ですか。
- 分かりにくかったところはありませんか。

また、あらかじめ振り返りの視点を子どもたちに示して、何について自己の学習を振り返り何を自己評価すればよいかを明確にするようにした。

⑤ 子どもたちの伸びを認め、共に伸びようとする教師のかかわり

本校では、子どもたちが、本時の自分のがんばりやつまずきを確認し、次時への課題をつかむために、毎時間、「振り返りカード」を書かせている。その場合、自分の学習状況にとどまらず、自分の「よさ」にも気付くようにするため、

- ・自分の良い点や得意なことをはっきりさせる。
- ・自分の「よさ」を伸ばすために必要な学習を考える。
- ・自分をもっと伸びるために、まだ分かっていないこと、できないこと、もっとがんばったらよいことをはっきりさせる。



という視点から書くように意識付けてきた。また、単元の中のどこかに必ず朱書きを入れ、1児童への励ましやアドバイスの言葉を書き、学習への意欲化を図るようにした。そして、評価基準と同様にこのような子どもたちの自己評価を教師はその後の学習について内容を調整したり、補充・発展的な学習をどう組み込んでいくかを考えたりする手立てとした。子どもたちのつまずきや伸びを確認した時、やさしくアドバイスしたり、小さな伸びを認めたりする「ゆとり」がほしいと考えた。本校の職員は、「どうすれば子どもたちのつまずきが減るのか。」というように、自分の指導のあり方を振り返る姿勢をもつ教師集団を目指している。

(2) 教育課程の編成

習熟度別学習で学年解体をした時に生まれる少人数担当教師の空き時間を低学年のTT指導に充て、有効にその時間を使うようにした。それに伴う時間割りの変更も弾力的に行われるようなシステムづくりに取り組むことができた。

週2回、朝の創意の時間をスキル学習の時間と位置づけることで全校を挙げて取り組むことができた。

(3) 「確かな学力」を向上させるための基盤作り

保護者に積極的に授業を公開したり、「学校だより」や「学年だより」、「少人数だより」を通して学校の取り組みを説明したりすることによって少人数指導に対する理解が得られるようになってきた。

少人数だよりの発行

少人数授業に対する保護者の理解を得るために少人数だよりを発行して学校の取り組みを説明し、少人数指導のよさや成果について理解してもらい、保護者の協力を得るようにしている。少人数指導に対してプラス評価が得られるようになってきている。

学校だより・学年だよりの活用

子どもたちの様子や学力の状況、学校としてそれにどう対応しているのか、また、家庭で協力して欲しいことは何かを伝える1つの方法として、学校だよりや学年だよりを活用した。学習状況調査の結果分析をはじめとして、今月の学習のポイントや用意してほしい学習用具なども保護者に伝え、子どもたちの学習が進むように協力を得る手立てとなった。

授業参観での少人数授業の公開

少人数指導の中でも特に習熟度別学習については、戸惑いを見せる保護者が少ない
高学年においてはその実績があり、効果が現れてきていることを児童も保護者も感じている
のでそれほどでもないが、少人数指導の経験の薄い3・4年の保護者にその傾向が強い。

そこで、各月の授業参観を生かし、積極的に少人数指導の授業を公開してきた。また、習熟度別学習をする単元については、事前に手紙を出して、保護者に学習のねらいや進め方について説明をし、どのコースにするか子どもたちと一緒に考えて選ん

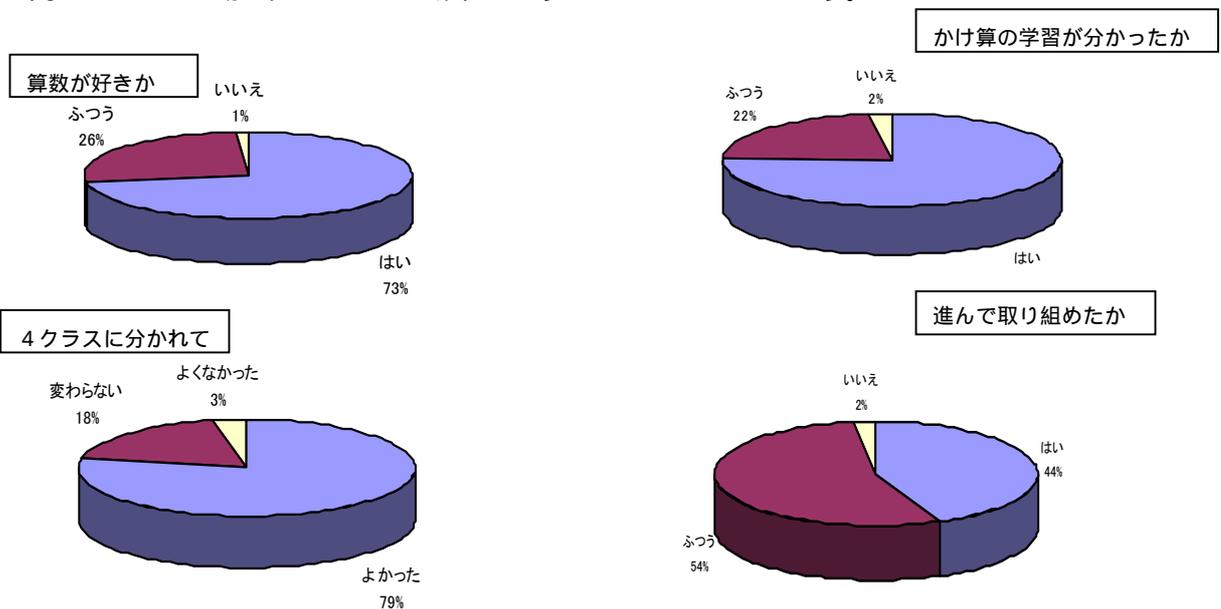


もらうようにした。その上でその学年の担任と少人数担当とでグループ分けを行い、子どもたちの意欲を大事にしながらより適切な学習集団をつくるように心がけた。

(4) 具体的な成果

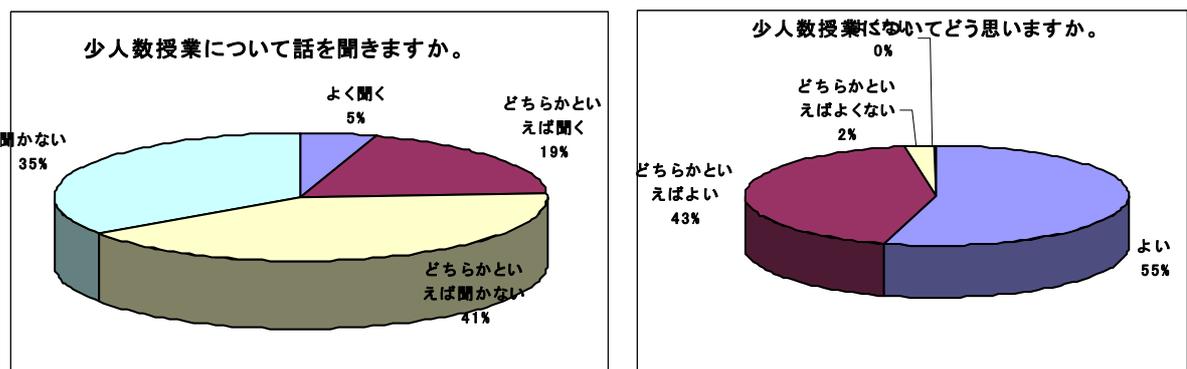
3年生では児童の実態により、今まで等質によるグループわけを中心として少人数指導を行ってきたが、来年度へのステップとして3学期に入って習熟度別学習を実施した。コース分けをする段階から保護者の理解を得るため、プレテスト 児童自身の希望コース選択 保護者とのコース選択 希望を重視した担任によるコース決定 授業参観での公開 参観しての感想の依頼という手順をふんだ。

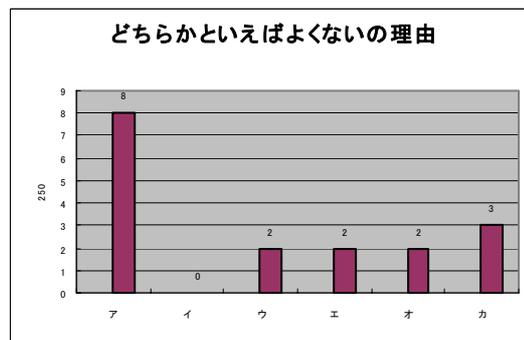
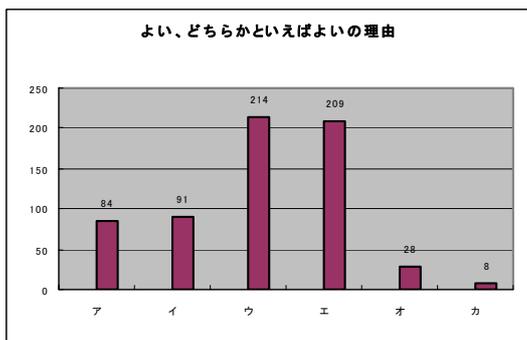
また、単元終了後に児童へのアンケートの実施し、意識調査を行った。この結果から見ると児童は掛け算の筆算の学習が分かったという項目と算数が好きという項目では「はい」と「ふつう」を合わせると99%とという数字が出ている。また、4クラス分かれてよかった、進んで取り組めたという項目でも肯定的に捕らえる児童が多く、新しい学習スタイルで興味、関心が高かったことを加味してもその成果といえることができるであろう。



保護者へのアンケート

児童の意識調査だけではなく、保護者に対しても少人数指導に対する意識調査を実施している。9月に行った保護者対象のアンケート調査では、少人数指導について「よい」(55%) 「どちらかといえばよい」(43%)と肯定的な意見が98%(去年は65%)とその効果を上げている。その結果は前述の学校だよりや少人数だよりに掲載し、少人数指導に対する意識を高めている。





ア 学力が向上する イ 学習意欲が向上する
 ウ 授業が分かりやすくなる エ 個に応じた学習ができる
 オ 担任以外の教師とかかわれる カ その他

ア 学力が低下する イ 学習意欲が低下する
 ウ 授業が分かりにくくなる エ 個に応じた学習ができない
 オ 担任以外の教師では不安だ カ その他

2 今後の課題

年間指導計画の見直し

ア 学習内容の系統を明らかにしたり、年間を通して学習形態をどうするかという見通しを持つ必要がある。どの学年のどの単元でどの形態で学習すれば効果的なのかという教育計画の立案が急がれる。

教材・教具の開発

ア 発展的な学習、補充的な学習における教材開発をもっとしていく必要がある。

イ 子ども一人一人が自分のつまづきを解決していけるような教材を開発をする。

研究組織及び内容の進化・発展

ア 全職員をあげて子どもたちと関わり、学力を向上させるためには、少人数担当を中心とする学力向上フロンティア部会からの提案をもとに、子どもたちの発達段階をふまえた系統立てた取り組みが不可欠である。

イ 本校では「個を生かす環境づくり」として学習環境の整備に取り組んだが、来年度はそれをもとに基礎基本の定着を図るための具体的な指導方法の工夫改善について、実践を中心に研究を進める必要がある。

学力等把握のための学校としての取組

少人数指導に対する児童の意識調査（各学期）

少人数指導に対する保護者の意識調査（前期・後期）

計算力の調査（適時）

漢字力定着度のテスト（各学期）

県版テストの実施（単元ごと）

県実施の学力状況調査（年1回）

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

学力向上フロンティアスクール東讃地区協議会での報告（2回）

・ 平成15年7月31日 ・ 平成16年2月10日 牟礼町公民館

香川町学校教育研究会での報告

平成16年2月25日 香川町教育委員会 会議室

（対象；教育長、各学校長、現職教育主任、生徒指導主事、香川南地区少年育成センター補導主事）

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】 15年度からの新規校

【学校規模】 19～24学級

【指導体制】 少人数指導

【研究教科】 国語 算数

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無